

イシャタオシ類似の呼称をもつ民間薬の研究

浜田 善利

熊本工業大学一般教育学科

Studies on "Ishataoshi" and related names as a folk medicine in Japan

Toshiyuki HAMADA

General Education, Kumamoto Institute of Technology

(Received May 20, 1993. Accepted July 1, 1993.)

Abstract

"Ishataoshi", "Ishairazu", "Gekataoshi" or some relatives were the names of the folk medicines used in Japan, since the Edo period. These names had the meaning that they were so effective that the doctors were confused or needless. These names were used for different kinds of the medicinal plants.

In this report, I studied the usage of these names by referring to literature and gathering examples in Kyushu.

As a result of this study, I found the relationship between the names and the plants.

1. *Geranium thunbergii* SIEB. et ZUCC. was used mainly in Eastern Japan.
2. *Ajuga decumbens* THUNB. was used mainly in Western Japan.
3. For these names, ten species of medicinal plants were recorded. These species were as follows: *Gynura japonica* (THUNB. ex MURRAY) JUEL; *Sambucus sieboldiana* (MIQ.) BLUME ex GRAEBN.; *Datura metel* L.; *Ajuga decumbens* THUNB.; *Swertia japonica* (SCHULT.) MAKINO; *Geranium thunbergii* SIEB. et ZUCC.; *Euchresta japonica* HOOK. fil.; *Cassia obtusifolia* L.; *Houttuynia cordata* THUNB.; *Aloe arborescens* MILL.

Key words Ishataoshi, Informal name, Folk medicine.

はじめに

民間薬の中には、日常生活に密着した薬として用いられる薬草がある。それらの名称は、植物名をそのまま使うものが多いが、薬物としての認識が強くなった場合や、一般に広く用いられて身近な薬となった場合には、単に薬草の植物名（方言名も含めて）そのものではなくて、あたかも愛称のように薬効を誉めた名称が用いられることがある。それは、例えばイシャタオシ、イシャイラズ、イシャゴロシ、ゲカタオシといった一連の呼称であり、この類型はすでに江戸時代からイシャタヲシの形で見られる。本報ではイシャタオシから始まって、これに類する名称を持つ日本の民間薬について、江戸時代か

ら現代までの用例を見ながら、その起源となる植物と薬効を検討した。

1. 江戸時代の文献に見られる呼称

(1) イシャタヲシ

イシャタヲシの名が見られるのは、熊本における用例が最初だったようである。肥後の熊本府では、再春館の医師でもあった村井琴山により宝暦14年(1764)に善音堂薬物会が開催された。その時の記録が『熊府薬物会目録』¹⁾であり、本書は現在は国立国会図書館などに写本が残っている。『熊府薬物会目録』によると、村井琴山のこの薬物会に矢部山産の山豆根が出品され、それに郷語として「イシャタヲシ」の名が付されている。すなわち当時の熊本で、山豆根の方言としてイシャタヲシの名前が使われていたことがわかる。

なお当時の肥後に山豆根が知られていたのは、宝暦8年(1758)に田村藍水が肥後国上益城郡二王木山でこれを得て、江戸の物産会に出品したもので、『物類品隲』²⁾(1763)で平賀源内が「方言イシャタフシと云」と記録して、図も収録している(Fig. 1)。



Fig. 1 『物類品隲』²⁾の山豆根

さらに小野蘭山は『本草綱目啓蒙』^{3a)}(1844)の山豆根の条に国内の名称を列記しているが、その中に「イシャタフシ肥後」とある。蘭山の肥後のイシャタフシの名は、江戸の物産会および『物類品隲』の記録に基づいているのであろう。『熊府薬物会目録』は現地の記録ということになる。

また『手板発蒙』⁴⁾(1823)にも、山豆根の条にイシャダフシとあり、『本草図譜』⁵⁾(1830)の巻二十九にも、山豆根に「いしやだをし肥後」とある。さらに『草木図説』⁶⁾木部巻四にも山豆根の図がある。

山豆根は『物類品隲』、『本草図譜』および『草木図説』の図からも明らかなように、マメ科の常緑の小低木ミヤマトベラのことである。

(2) ゲカコロシ

外科コロシは、『本草綱目啓蒙』^{3b)}の曼陀羅花、テウセンアサガホの項にあり、讃州と記されている。

(3) ゲカダラシ

外科ダラシは、『本草綱目啓蒙』^{3b)}の曼陀羅花、テウセンアサガホの項に、外科コロシと並べて、伯州、石州、予州とある。

2. 現代の文献⁷⁾に見られる呼称

(1) イシャタオシ, イシャダオシ, イシャタフシ (医者倒し)

① キランソウの呼称

『沓岐島方言集』⁸⁾によれば、沓岐島では、キランソウを当てている。

『あなたの健康に役立つ薬草ハンドブック』^{9a)}(埼玉県)によれば、九州、四国地方でキランソウのことをいうとある。

『信州薬草百科』¹⁰⁾、『京都の薬草百科』¹¹⁾、『続岡山の薬草』¹²⁾、『やまぐちの薬草』¹³⁾、『新・佐賀の薬草』^{14a)}、『カラー版熊本の薬草』¹⁵⁾では、キランソウを当て、さらに『新・佐賀の薬草』^{14a)}にはイシャタフシの呼称も記録されている。

② ゲンノショウコの呼称

『和歌山県植物方言集』¹⁶⁾によれば、和歌山県那賀郡で、『児島湾方言集』¹⁷⁾によれば、岡山県御津郡で、また『日本俗信辞典』¹⁸⁾によれば、京都で、それぞれゲンノショウコを当てている。

『日本植物(草本類)方言集』¹⁹⁾によれば、京都(何鹿)、和歌山(那賀)、兵庫(津名、三原)、岡山、徳島(美馬)で、ゲンノショウコのことをイシャタオシと呼んでいる。

『岡山の薬草』^{20a)}、『新・佐賀の薬草』^{14b)}では、ゲンノショウコを当てている。

『現代日本語方言大辞典』²¹⁾によれば、ゲンノショウコは東日本ではすべてゲンノショウコと呼んでいるのに対して、僅かに島根県、岡山県、徳島県で、イシャダオシの名が記録されている。

③ ドクダミの呼称

『新・佐賀の薬草』^{14c)}では、大分でドクダミをイシャタオシと呼ぶとある。

④ センプリの呼称

『広辞苑』²²⁾によれば、医者倒しはセンプリの呼称としてあげられているが、そう呼んでいる地域は記されていない。

(2) イシャコロシ, イシャゴロシ (医者殺し)

① キランソウの呼称

『土佐方言集』²³⁾によれば、高知県幡多郡では、キランソウを当てている。

『信州薬草百科』、『京都の薬草百科』、『続岡山の薬草』、『やまぐちの薬草』、『原色長崎の薬草』²⁴⁾では、キランソウを当てている。

『民間薬としてのキランソウ』²⁵⁾によれば、長崎県と佐賀県で、キランソウをイシャゴロシと呼んでいる。

② ゲンノショウコの呼称

『秩父の伝説と方言』²⁶⁾によれば、埼玉県秩父郡で、『岡山動植物方言図譜』²⁷⁾によれば、岡山県窪郡菅生で、『愛媛の方言』²⁸⁾によれば、愛媛県で、『日本俗信辞典』によれば、埼玉や東京で、それぞれゲンノショウコを当てている。

『日本植物(草本類)方言集』によれば、秋田

(由利, 河辺), 埼玉 (秩父), 島根 (美濃), 岡山 (都窪), 山口 (波) で, ゲンノショウコのことをイシャコロシと呼んでいる。

『秋田の薬草』²⁹⁾, 『秋田薬草図鑑』³⁰⁾, 『やまぐちの薬草』では, ゲンノショウコを当てている。

③ドクダミの呼称

『豊後方言集』³¹⁾によれば, 大分県では, ドクダミを当てている。

④その他の呼称

『東筑摩郡方言』³²⁾によれば, 長野県東筑摩郡では, みそ汁に湯を加えたものを医者殺しと呼んでいる。

また新潟県小千谷市³³⁾では, 食事のあとで残った魚の骨に熱い湯を注いだものを, 医者殺しという。

(3) イシャイラズ (医者要らず)

①キランソウの呼称

「民間薬としてのキランソウ」によれば, 長崎県, 熊本県, 大分県, 鹿児島県で, キランソウをイシャイラズと呼んでいる。

『カラー版熊本の薬草』では, キランソウを当てている。

②ゲンノショウコの呼称

『荘内方言考』³⁴⁾によれば, 秋田県北秋田郡で, 『中越方言集』³⁵⁾によれば, 新潟県長岡で, 『和歌山県植物方言集』によれば, 和歌山県那賀郡で, それぞれゲンノショウコを当てている。

『日本植物 (草本類) 方言集』によれば, 秋田 (北秋田), 長岡市, 和歌山 (那賀), 岡山, 山口で, ゲンノショウコのことをイシャイラズと呼んでいる。

『岩手の薬草』³⁶⁾, 『岩手の薬草百科』³⁷⁾, 『秋田薬草図鑑』, 『あなたの健康に役立つ薬草ハンドブック』 (埼玉県), 『越後における薬用植物』³⁸⁾, 『山梨の薬草』³⁹⁾, 『信州の薬草』⁴⁰⁾, 『信州薬草百科』, 『岐阜県の薬草』^{41a)}, 『京都の薬草百科』, 『岡山の薬草』^{20c)}, 『新・佐賀の薬草』^{14b)}では, ゲンノショウコを当てている。

③キダチロカイ (アロエ) の呼称

『宮城県の薬草』⁴²⁾, 『あなたの健康に役立つ薬草ハンドブック』^{9b)} (埼玉県), 『信州薬草百科』, 『岐阜県の薬草』^{41b)}, 『岡山の薬草』^{20b)}, 『徳島県薬草図鑑』上⁴³⁾, 『カラー版熊本の薬草』では, キダチロカイを当てている。

④サンシチソウの呼称

『新・佐賀の薬草』^{14d)}では, サンシチソウを当てている。

⑤ニワトコの呼称

『新・佐賀の薬草』^{14e)}では, ニワトコを当てている。

⑥ハブソウの呼称

『和歌山県植物方言集』によれば, 和歌山県東牟婁郡新宮では, ハブソウを当てている。

(4) イシャシラズ (医者知らず)

「民間薬としてのキランソウ」によれば, 熊本県で, キランソウをイシャシラズと呼んでいる。

(5) イシャナカセ (医者泣かせ), イシャナカシ (医者泣かし)

①キランソウの呼称

『信州薬草百科』では, イシャナカシに, 『続岡山の薬草』では, イシャナカセにキランソウを当てている。

②ゲンノショウコの呼称

『水窪方言の基礎調査』⁴⁴⁾によれば, 静岡県磐田郡で, 『三河北設楽郡方言集』⁴⁵⁾によれば, 愛知県北設楽郡で, 『愛媛の方言』によれば, 愛媛県で, 『日本俗信辞典』によれば, 東京および山口で, イシャナカセにそれぞれゲンノショウコを当てている。

また『愛媛の方言』によれば, 愛媛県でイシャナカシといって, ゲンノショウコを当てている。

『日本植物 (草本類) 方言集』によれば, 静岡 (賀茂, 田方, 磐田), 愛知 (北設楽), 富山, 福井 (大阪), 岡山で, ゲンノショウコのことをイシャナカセと呼んでいる。

『京都の薬草百科』, 『岡山の薬草』^{20a)}, 『やまぐちの薬草』, 『新・佐賀の薬草』^{14b)}では, ゲンノショウコを当てている。

(6) イシャコロバシ (医者転ばし)

『浜藪』⁴⁶⁾によれば, 仙台では, 「膳の湯に汁をさしたる也。養生になる事医者もかなはぬといふ心也」とあって, 湯に少し汁を加えたものと呼んでいる。

(7) ゲカダオシ (外科倒し)

①キランソウの呼称

「民間薬としてのキランソウ」によれば, 熊本県で, キランソウをゲカダオシと呼んでいる。

『原色長崎の薬草』, 『新・佐賀の薬草』^{14a)}では, キランソウを当てている。

②チョウセンアサガオの呼称

『新・佐賀の薬草』^{14f)}では, 外科タオシにチョウセンアサガオをあげている

(8) ゲカコロシ (外科殺し)

①チョウセンアサガオの呼称

『新・佐賀の薬草』^{14f)}では, 外科コロシにチョウ

Table I Medical names and their area in Japan.

合弁花類	
◎キク科	
サンシチソウ <i>Gynura japonica</i> (THUNB. ex MURRAY) JUEL	
イシャイラズ：佐賀県	
◎スイカズラ科 ニワトコ <i>Sambucus sieboldiana</i> (MIQ.) BLUME ex GRAEBN.	
イシャイラズ：佐賀県	
◎ナス科	
チョウセンアサガオ <i>Datura metel</i> L.	
ゲカコロシ：讃州（江戸時代）、佐賀県	
ゲカタオシ：伯州、石州、予州（江戸時代）、佐賀県	
◎シソ科	
キランソウ <i>Ajuga decumbens</i> THUNB.	
イシャタオシ：長野県、京都府、岡山県、山口県、佐賀県、長崎県（壱岐）、熊本県	
イシャコロシ：長野県、京都府、岡山県、山口県、長崎県	
イシャイラズ：長崎県、熊本県、大分県、鹿児島県	
イシャシラズ：熊本県	
イシャナカセ：長野県、岡山県	
ゲカタオシ：佐賀県、長崎県、熊本県	
◎リンドウ科	
センブリ <i>Swertia japonica</i> (SCHULT.) MAKINO	
イシャダオシ：不明	
離弁花類	
◎フウロソウ科	
ゲンノショウコ <i>Geranium thunbergii</i> SIEB. et ZUCC.	
イシャタオシ：京都府、兵庫県（津名、三原）、和歌山県（那加郡）、岡山県（御津郡）、島根県、徳島県（美馬）、佐賀県	
イシャコロシ：秋田県（由利、河辺）、東京都、埼玉県（秩父郡）、岡山県窪郡菅生、島根県（美濃）、山口県（波）、愛媛県	
イシャイラズ：岩手県、秋田県（北秋田）、新潟県（長岡）、長野県、埼玉県、山梨県、岐阜県、京都府、和歌山県（那賀）、岡山県、山口県、佐賀県	
イシャナカセ：東京都、富山県、福井県、京都府、静岡県（磐田、賀茂、田方）、愛知県（北設楽）、岡山県、山口県、愛媛県、佐賀県	
◎マメ科	
ミヤマトベラ <i>Euchresta japonica</i> HOOK, fil.	
イシャタヲシ：肥後（江戸時代）	
エビスグサ <i>Cassia obtusifolia</i> L.*	
イシャイラズ：和歌山県東牟婁郡新宮	
◎ドクダミ科	
ドクダミ <i>Houttuynia cordata</i> THUNB.	
イシャタオシ：大分県	
イシャコロシ：大分県	
単子葉類	
◎ユリ科	
キダチロカイ <i>Aloe arborescens</i> MILL.	
イシャイラズ：宮城県、埼玉県、長野県、岐阜県、岡山県、徳島県、熊本県	
その他	
◎腫物のうみを出すのに用いられる薬草	
ゲカコロシ：東京都（西多摩）	
◎みそ汁に湯を加えたもの	
イシャコロシ：長野県東筑摩郡	
◎魚の骨に湯を注いだもの	
イシャコロシ：新潟県小千谷市	
◎膳の湯に汁をさしたもの	
イシャコロバシ：宮城県（仙台）	

*『日本植物（草本類）方言集』によると、新宮ではエビスグサのことをハブソーとよんでいる。

センアサガオをあげている。

②その他

『方言』⁴⁷⁾によれば、東京都西多摩郡檜原で「腫物のうみを出すのに用いられる薬草の名」という。

3. 植物名と呼称との対比

これまでにあげた内容をまとめて、それぞれの薬用植物に対する各種の呼称と、その呼称の使用例が記録されている県名を整理すると、Table I のようになる。

4. 呼称と薬効との関係

薬用植物が種名とは別に、それぞれの呼称で呼ばれた場合の薬効については、それを明らかにする目

的で調査する必要がある。それは例えばある県の薬草の本に、ゲンノショウコにイシャイラズの名称が付記してあっても、そこに記述されているゲンノショウコの薬効と、イシャイラズと呼ぶときの薬効は、必ずしも一致するとは限らないからである。

その為に私は、以前九州の中部を中心に、それぞれの呼称で呼ばれるときの薬効について調査し、さらにその後も僅かながら記録を取っている。九州ではイシャイラズと呼ぶものは、キランソウであることが多い。そこでキランソウについて、各地方で効くと伝えられている病名をまとめると Table II のようになる。

Table II Usage of *Ajuga decumbens* THUNB* in Kyushu.

呼 称	病名とその使用地名
イシャイラズ	胃潰瘍 (熊本県大矢野町) 胃腸病 (出水市) 肝臓病 (熊本市, 人吉市) 高血圧 (大分県, 長崎県) 中風 (長崎県) 神経痛 (人吉市, 熊本県砥用町, 同内牧町) 喘息 (熊本県玉東町) 腫物 (大牟田市) 万病の薬 (熊本県玉東町, 清和村, 都城市)
イシャゴロシ	腎臓結石 (佐賀県) 膀胱結石 (佐賀県) 高血圧 (佐賀県) 中風 (佐賀県)
イシャシラズ	肝臓病 (熊本県植木町) 浮腫, 水腫 (熊本県植木町) 胃腸病 (特に下痢) (熊本県天草町)
ゲカタオシ	打撲, 捻挫 (熊本県南関町)

*日本⁴⁸⁾では、キランソウは全草を乾燥したものを、鎮咳、去痰、解熱、止瀉薬として、気管支炎、咽喉腫痛、下痢、赤痢、疔瘡などに用いる。中国⁴⁹⁾ではキランソウ (白毛夏枯草, 金瘡小草) は、効用が止咳化痰、清熱、涼血、消腫、解毒。主治が気管支炎、吐血、衄血、赤痢、淋病、咽喉腫痛、疔瘡、癰腫、跌打損傷である。

おわりに

(1) 代表的な薬草

イシャタオシ系の呼称が用いられるものは、民間薬として使い易い薬草であり、全国的にみると、東日本を中心とするゲンノショウコと、西日本を中心とするキランソウがある。

(2) 呼称と薬効との関係

キランソウを例として、一連の呼称とそれに対応

して効くと伝えられる病気との関係を見ると、イシャイラズ、イシャゴロシ、イシャシラズなどと呼ばれる場合には、消化器系、循環器系、呼吸器系、泌尿器系などの、主として内臓の病気に用いられていることが多い。それに対して、ゲカタオシ、ゲカゴロシなどと呼ばれる場合には、打撲、捻挫などの外科的な処置に類する用法であることが推察される。

(3) 呼称の意義

イシャイラズという呼称の意味が極限状態にまで達したときには、究極の薬である「万病の薬」とい

う表現も見られる。しかし、現実には万病に効く薬は存在しないのであるから、イシャイラズに対しての過大評価か、あるいは現代のように医療制度が充実していなかった、かつての日本の社会における民衆のせつない希望、とでも解釈すべきものであろう。

文 献

- 1) 村井琴山：熊府薬物会目録，写本，熊本大学図書館薬学部分類蔵，1764.
- 2) 平賀源内，杉本つとむ解説：物類品鑑，八坂書房，東京，巻五の図，1972.
- 3) a) 小野蘭山，杉本つとむ編著：本草綱目啓蒙，早稲田大学出版部，東京，p.274；b) 同上，p.245，1974.
- 4) 大阪屋四郎兵衛原著，難波恒雄編集：増補手板発蒙，大阪漢方医学研究所，箕面市，p.28，1980.
- 5) 北村四郎監修：本草図譜総合解説，第2巻，同朋社，京都，p.626，1988.
- 6) 飯沼愨齋原著，北村四郎編註：草木図説，木部，上，保育社，大阪，巻4，図27，p.436，1977.
- 7) 各地の方言集などは，下記の日本国語大辞典より引用し，それらは文献の末尾に（日本国語大辞典による）と付記した。日本大辞典刊行会：日本国語大辞典全20巻，小学館，東京，1972-76.
- 8) 山口麻太郎：壱岐方言集，1937（日本国語大辞典による）.
- 9) a) 埼玉県薬剤師会編：あなたの健康に役立つ薬草ハンドブック，埼玉新聞社，浦和市，p.68；b) 同上，p.81，1987.
- 10) 信濃生薬研究会編：信州薬草百科，信濃毎日新聞社，長野市，p.84，1983.
- 11) 松岡敏郎，山原條二：京都の薬草百科，京都新聞社，京都市，p.73，1987.
- 12) 奥田拓男監修：続岡山の薬草，山陽新聞社，岡山市，p.70，1984.
- 13) 山口県薬剤師会：やまぐちの薬草，山口県薬剤師会，山口市，p.75，1989.
- 14) a) 佐賀県薬務課，佐賀県薬業指導所：新・佐賀の薬草，佐賀県，p.60；b) 同上，p.72；c) 同上，p.122；d) 同上，p.132；e) 同上，p.84；f) 同上，p.109，1990.
- 15) 浜田善利：カラー版熊本の薬草，熊本日日新聞社，熊本市，p.30，1983.
- 16) 水口 清：和歌山県植物方言集，1954（日本国語大辞典による）.
- 17) 岡 秀俊：児島湾方言集，1934（日本国語大辞典による）.
- 18) 鈴木棠三著：日本俗信辞典，角川書店，東京，p.250，1982.
- 19) 日本植物友の会編：日本植物（草本類）方言集，日本植物友の会，東京，p.83，1966.
- 20) a) 奥田拓男監修：岡山の薬草，山陽新聞社，岡山市，p.136；b) 同上，p.50，1984.
- 21) 平山輝男他編：現代日本語方言大辞典，第3巻，明治書院，東京，p.1816，1992.
- 22) 新村 出編：広辞苑第四版，岩波書店，東京，p.132，1991.
- 23) 橋詰延寿：土佐方言集，1932（日本国語大辞典による）.
- 24) 高橋貞夫：原色長崎の薬草，長崎県生物学会，長崎市，p.115，1982.
- 25) 浜田善利，西 淳子，山永裕子，宮明邦夫：民間薬としてのキラソウ，BOTANY，29，pp.31-34，1979.
- 26) 市教育委員会：秋父の伝説と方言，1962（日本国語大辞典による）.
- 27) 桂又三郎：岡山動植物方言図譜，巻3，草類，1932（日本国語大辞典による）.
- 28) 武智正人：愛媛の方言，1957（日本国語大辞典による）.
- 29) 小松昌二郎：秋田の薬草，無明舎，秋田市，p.138，1978.
- 30) 畠山陽一：秋田薬草図鑑，無明舎出版，秋田市，p.97，1984.
- 31) 市場直次郎他：豊後方言集，1936（日本国語大辞典による）.
- 32) 諏訪郡教育会：東筑摩郡方言，1898（日本国語大辞典による）.
- 33) 中山康夫氏からの私信による（1992年8月）.
- 34) 黒川友恭：荘内方言考，1891（日本国語大辞典による）.
- 35) 長岡中学国語科：中越方言集，1936（日本国語大辞典による）.
- 36) 安本広静，片岡佐太郎：岩手の薬草，熊谷印刷出版部，盛岡市，p.65，1979.
- 37) 熊谷明彦：岩手の薬草百科，岩手日報社，盛岡市，p.47，1989.
- 38) 野田光蔵：越後における薬用植物，北都書房，新潟市，p.76，1978.
- 39) 山本裕康，村松正文：山梨の薬草，山梨日日新聞社，甲府市，p.98，1984.
- 40) 信濃生薬研究会編：信州の薬草，信濃毎日新聞社，長野市，p.118，1979.
- 41) a) 尾藤忠旦：岐阜県の薬草，郷土出版社，岐阜市，p.90；b) 同上，p.161，1986.
- 42) 高橋和吉編：宮城県の薬草，宝文堂，仙台市，p.142，1982.
- 43) 村上光太郎：徳島県薬草図鑑，上，徳島新聞社，徳島市，p.28，1984.
- 44) 山口幸洋：水窪方言の基礎調査，1960（日本国語大辞典による）.
- 45) 原田 清，永江土枝次，岡田松三郎：三河北設楽郡方言集，1934（日本国語大辞典による）.
- 46) 匡子：浜藪，1800年代（日本国語大辞典による）.
- 47) 方言（雑誌）（日本国語大辞典による）.
- 48) 三橋 博監修：原色牧野和漢薬草大図鑑，北隆館，東京，p.443，1988.
- 49) 江蘇新医学院編：中薬大辞典，上冊，上海人民出版社，上海，p.751，1977.